

昼夜で立場が逆転する俺たちの床事情 は、とびっきりエロすぎるから他人には 絶対に言えないよなって話

体験版

ふわふわ系隠れドS年上部下×しごでき強面年下上司

受け：三井寺 明（みいでら めい）

攻め：四ツ谷 汐音（よつや しおん）

要素：リーマン、強気受け、拘束、媚薬、玩具、尿道責め、前立腺責め、屋外セックス、射精管理、連続絶頂、受けフェラ

「四ツ谷、またミスってるってこの資料！」

「え、嘘でしょ、俺としたことが」

「普通にページの順序がおかしいだろ」

「なんでスライドが前後で入れ替わっちゃったんですかねえ」

「知るか！とりあえず作り直せ！」

印刷された資料の問題箇所を指摘しても、まるで自分事ではないかのような物言いをする。そもそもお前が手に持っているそれは今日の午前を締め切り期限にしている、11時に出されたものなんだが。ギリギリに提出しておいて凡ミスをかますとは何事だと言いたい気持ちを、ぐっところえた俺を褒めてほしい。

四ツ谷汐音は、年上ながらこの出来なさ具合で困りものだ。ただし雰囲気で奇跡的に許されるタイプで、ミスを連発しても助けてもらえることが多い。実際に今も、同僚達からまた何かあったのか、しょうがないなあと甘やかされている。なんなら、三井寺さん厳しいからとまで言われている。違う、俺が厳しいんじゃない。四ツ谷があまりにも不出来なだけだと、咳ばらいをひとつしてけん制する。四ツ谷は半年前、異動で俺の部署に来た。3つ年上の彼は、仕事場では俺の部下で、俺は年下だけど彼の上司だ。

でも俺たちの関係は、昼夜で上下が逆転する。

「明、今日は何を使って遊びたい？」

「い、いいって、使わなくていい！どれも嫌だって！」

「そんな期待した目で見られたら、全部使ってあげたくなるなあ」

ベッドの上でガチガチに縛られた俺の目の前に、複数個の卑猥な玩具を持ってくる彼は、昼にスライドの不備を指摘した人物と同じだ。ただしその顔つきは、昼とは比べ物にならないくらい意地悪なオーラを放っているが。

四ツ谷汐音は、俺の部下で、年上の恋人で、そしてセックスのときは容赦がない暴君だ。

俺たちの関係が始まったきっかけは、とある事故からだった。それは、休憩中の喫煙室で起きた。俺がたまたま見ていたスマホの画面が、急に入ってきた四ツ谷に見られてしまったのだ。しかも最悪なことに、その画面はゲイ専用のマッチングアプリ。まずい、仕事中にこんなものを見ているのを知られてしまった。しかも性的マイノリティであることもバレた。終わった、人生詰んだかもしれない、どうにか誤魔化さなくてはと思っていたところ、彼は自分のスマホを操作して、俺に全く同じ画面を見せてきた。

「三井寺さんもそれやってたんですね。俺もアカウント持ってますよ」

「は？」

「ほらこれ」

まるで一般的に広く認知されたSNSとでも言いたげに、彼は自分のアカウントのページを見せてきた。四ツ谷のアイコン用の顔写真はマスクで隠れているが、ほぼ本人で間違いない。嘘だろ、お前もそっちの人間なのかとあっけにとられていたら、三井寺さんのも見せてくださいと言われてしまった。もう隠しようもないので自分のアカウントも晒すと、普通にゲイバーにいるような会話が始まる。

「三井寺さんってネコなんだ。へー、綺麗系だからウケよさそう」

「実際はそんなに食いつき良くないぞ」

「まあ警戒はしますよね。ホントにコイツが来んのかよって思いますし」

「まず目的がやることだしな」

「お互いにしたいことが明確なのは分かりやすいですけどね」

同じ爆弾を抱えている俺たちは、この話で思いのほか意気投合した。そしてそのノリで夜飲みに行って、なんなら身体も繋げた。身体の相性は悪くなかったの
で、それから3回ほどヤったあたりで、四ツ谷が俺に言ってきたのだ。一回試
しで付き合わないかと。

正直、会社で顔を合わせる間柄なので少し悩んだ。でも、本人もお試しと言っ
ているし、大人同士だから後腐れはないだろう。気まづくなってもお互いに今後も
異動はあるだろうし、なんとかなるかということで、俺たちの交際が始まった。
それからもう3か月ほど経っただろうか。四ツ谷は私生活でも若干ふわふわして
はいるんだが、唯一雰囲気が変わるのはセックスの時だ。お試し交際前のセッ
スの時も感じてはいたが、コイツはガチガチのドSだった。救いがあるのは、相
手を痛めつけて興奮するタイプではないこと。じゃあどういう方向にSかと言
うと、それはもう、相手が嫌っていうまで責めて、そこから更に追い込んで、ぐ
ちゃぐちゃになるまで泣かせるのが大好きなSだ。

しかも相手が高飛車なほど燃えるらしい。つまり彼にとっては、俺がドタイプ。
素の性格が彼の好みとマッチするのが嬉しいような、Mではない俺としては悲し
いような気持ちになる。でも俺は簡単に相手にへりくだる性格ではないから、四
ツ谷は喜ぶ一方だ。

「今日は明が大好きなやつ持ってきたんだ」

そんなドSの彼が持ってきたのは、おそらく尿道に使うと思われるブジーだった。ちなみに俺は、尿道責めが特別好きなわけじゃない。気持ちよくないとは言わないが、大好きはあまりに誇張表現だ。だから銀色に光る棒を見て表情を萎えさせていると、彼は小さいチューブから絞りだした薬を塗り始めた。

「明が痛くならないように、お薬塗っておくからね」

「ッ、それ、その薬って...！前に使ったやつじゃないだろうな」

「そう。前に明が、もう嫌だって暴れてたやつ」

ためらうことなくブジーにまんべんなく塗布されているのは、どうやら俺が前に使われて悶絶した媚薬と一緒にらしい。何も知らずに使用された時は、身体の変化についていけずにイキまくった気がする。確かにそれを塗られたら痛みは減るかもしれないが、どぎつい快感に身体は悲鳴をあげそうだ。

なんで俺が嫌がると分かっていて、あえてまたそれを使ってくるんだ。このサディストめ、俺をいじめて楽しむなど、縛られた身体で暴れる。

「嫌だ、使うなっ！それ塗られたらわけわかんなくなる！」

「わけわからなくなるのがいいんだって。ほら、明のココにも塗ってあげる」

「んひ...ッッ！！？」

でもまだ、ブジーに塗られるまでならよかった。最低な汐音は、平然と俺の尿道口にも塗り込んでくる。両手が縛られている俺は、奴が薬を追加するのを拒めな

い。しかも膝を曲げた状態で足が固定されているので、広げた足も閉じられないから、薬が効いていく様子をじっくりと眺められてしまう。

時間とともに熱くなって、チクチクと針でつつかれたような痒みが伴っていく。びく、びく、と無刺激の熱が反応しているのが恥ずかしい。刺激を求めて疼いているそこを、ちょんとつつかれるだけでどうにもならないほど悶えてしまう。

「んはぁあっ！」

「ちょっとつついただけなのに、そんな声出しちゃうんだ？」

「ッ、あ、あ、や、やめ、ろ、遊ぶな...！」

「遊んであげないと辛いのは明じゃないの？どう？そろそろコレ欲しくなってきたでしょ？」

「〜〜っ！！」

クリクリと尿道に当てられるブジーに、切ない声が絞り出ていく。浸透していく媚薬の影響で、尿道の中も疼いていた。もしも手が動いたとしても、その場所を自分で刺激するのは簡単じゃない。だから絶対にブジーを入れてもらわないといけないけれど、それを口にするのは嫌だった。でも、言わなきゃ終わらない。今後の展開が分かる程度には、俺は汐音から教育を受けている。

「それ、入れてっ...！」

「入れるだけで満足なの？」

「っ、抜き差しして、擦って」

「奥まで入れるのは？」

「それもっ！それも全部...！」

「全部してなんて...。欲張りさんだねえ、明は」

「うあああッ！！」

最初のうちは、まだ汐音にも理性がある。だから俺が従順な態度を取れば、そこまですじめられることはない。恥ずかしい言葉を口にすれば、すぐに彼からの許しが得られた。

でも問題は、ブジーを入れてもらうまでの道のりじゃなかった。冷たい棒が内部に入り込んできた瞬間、あまりの気持ちよさにぶっ飛ぶかと思った。瞬時に全身に火がともる。ずりり、と薬の染みた中を、同じ薬を纏った先端が擦っていくと、強い快感に不自由な身体が大きくしなる。

けれど性悪な彼は、一気にブジーを進めてこない。あえてゆっくり挿入して、俺が悶える様子を観察している。ふざけるな、奥まで入れろと言ったんだから早く入れきってくれと、唇を噛んで首を振った。

「はあ、はあああうう...っ！ん、んんっ！」

「どうしたの明。そんな切なそうな顔して」

「〜〜〜...っ！！！」

全てを見透かした上での問いかけに、つい汐音を睨んでしまう。なんで切ない顔をしているか、お前が一番分かっているくせに。けれど反抗的な態度を取ったら、ぴたりとブジーの進行が止まって、入口へと緩やかに逆行していく。

まずい、抜かれるのはもっとまずい。媚薬が追加された今、無刺激になったら狂ってしまうかもしれない。どうにか奥まで入れてもらわなければと、俺は慌てて口を開く。

「やっ、止めるな...！もっと奥、奥まで入れろ...！」

「んん？」

「ッ！ん、じゃ、なくて」

「もどかしいの？」

「ひうっ！」

何も出来ないのが悔しいけれど、逆行した分がまた戻って、じわじわと進んでいくだけで感じまくっているのがもっと悔しい。言いなりになって、息を乱して、期待で腰が動く。時々途中で抜き差しされると、暴れ出したいくらいもどかしかった。いつの間にか睨むための目が、彼の手と、中のブジーに釘付けになる。

「んは、はっ、はっ、はう...！」

「そんなに見ちゃって。やらしいね？」

「っ、ちが、ちがう、も、早くしろお...！」

「変態な明に、我慢は難しいか」

「んおあゝッ！！？」

ただしコイツは、責める側になったら容赦がない。だから焦らしていたかと思ったら、一気に奥まで進められて、思わず獣のような声を出してしまった。しかも

届いたら、わざと奥をこね回すように棒を回される。凶悪なくらいの快感に、声も出せないほど悶絶した。

「ふ、ぐううう……っ！！？んふ、う、ううううっ！！」

「あ〜あ、届いちゃったね、明が好きなところまで。トントンってされたら頭真っ白になるよ？」

「うああっ！ああっ！あ、あゝ、だめ、え、それっ、ん、んんんっ！」

こつ、こつ、と軽く棒を抜き差しされて、奥を叩かれるのもたまらない。絶頂まで一瞬で高められるような感覚がする。でも精液の通り道を塞がれているから、先走りだけが僅かにこぼれた。イキそうでイケないこの苦痛は、尿道責めならではだ。

でも、汐音が今日用意したのはこのブジーだけじゃない。彼はベッドに散らばった玩具の中から新たな遊び道具を手にとって、俺の先から出ているブジーの端へと当てる。

「このブジーにはバイブ機能とがついてないから、かわりにローター当てて、中まで良くかき混ぜてあげるね」

「ッ！！？いい、そんなの別につ」

「いらないとかじゃないでしょ？明にしてあげるって言ってるの」

「んゝ ああああああああっ！！？」

汐音が手に取ったのは、特徴のないピンク色のローターだった。玩具のマニアックさで比べたら、多分尿道に入れているブジーの方がレベルが高い。でも二つを組み合わせて使われたら、俺への負荷は倍以上になる。

高い振動音を立てたローターが、ブジーに当てられる。振動は俺の中に入った部分にまで伝わって、奥の方まで震えている。ヤバい、薬で敏感になった今これはヤバいと目を見開いたら、手持無沙汰になった汐音の指がにゅりにゅりと亀頭やカリ裏をくすぐり始めた。

「ひいいっ！！？んうあ、あっ、や、やあああっ！！？」

「ぬるぬるの先っぽも可愛がってあげる」

「んっ、ッ、いいあ、ああ、だ、め、今だめ、っ、んんんんう！うは、あ、や、嫌、ううゝ〜〜っ！！」

ローターだけでも相当キツイ快感には違いなかった。疼く中がまんべんなく震える気持ちよさで、ガクガク腰が揺れるほどには。なのにひと際敏感な場所を追加でいじめられたら、正気を保ってられない。

びく、びく、と俺の自身が揺れた。どれだけ上下に揺れたところで、汐音の指から逃げられるわけじゃないのに。射精が出来るわけでもないのに。それでも健気な身体は、彼の手を食い止めようとしていた。太ももの内側の筋肉に力が入って、どうにか股間を守ろうとする。でも縛られているから、足を閉じることはできない。彼に向けて晒された急所は、しつこいくらいに愛でられた。

くにくにくにと、ブジーが入って広がる穴の周りを弄ばれる。指先が何度も穴の縁を撫でると、いよいよ我慢のピークがやってきた。出したい、その隙間からは

出せないものを今すぐに吐き出したい。この気持ちよさの頂点にたどり着きたいと、俺は汐音に懇願する。

「んんんん〜〜〜ッッ！！ッあゝ、あああ、も、出したいいいいっっ！！ぬ、いて、イキたい、イキたいイキたいっ！！」

「明ったら、こんなにガクガクしちゃって。男なのに自分で出せなくてかわいそう」

「は、はう、うう、ッ、だ、から、抜いてって、言っ」

「でもほら、明は特別だから。女の子の気持ちよさも分かるもんね？」

「んんううっ！！？」

けれど汐音が、簡単にイカせてくれるわけがなかった。はあ、と熱い息を吐いた汐音は、俺の熱をくすぐるのをやめて、今度は中に手を入れてくる。嘘だろ、そっちもいじるのかよと、嫌がる身体が反射で弾む。ただし気持ちはとにかく身体の不自由はないから、彼の手を受け入れるしかない。

ただでさえブジーで奥を突かれた中で、尿道全体が震えているのに。裏側からも前立腺を揉まれたら狂ってしまうと思った。でもそれを分かったうえで、汐音は俺の前立腺を擦ってくる。

「ひいいいゝっ！！んん、ッぐ、あ、だ、め、そこ無理...っ！！」

「大丈夫。ゆっくりゆっくり、可愛がってあげるから」

「ふうあ、あああ、ああっ、〜〜〜っっ！！！」

ぬりり、ぬりいとゆったり擦られると、甘い気持ちよさに心が傾く。だけれど甘やかされる反対側は、こちゅ、こちゅ、と急所を押している。薬で敏感にされた場所が、強烈な快感と、とろける心地よさで挟み撃ちにされていた。

じんと腹に響くのが、どちらの刺激から生まれた快感なのかも分からない。なのにひたすら高めるばかりの指先が、俺を翻弄する。

「んふ、うう、あ、あっ、も、嫌あああ...ッ！！ひ、っぐ、イキたい、イキたいいいっ！」

「すごくイキたいのに、イケなくて辛いね？でも明は、まだまだこんなんじゃ足りないでしょ？えっちな明が楽しめるように、ここにもお薬塗ろうね」

「っっ！！！？？」

けれど汐音はあくまで、俺が快感で狂うほどに乱れるのが好きだ。だから俺側の負担を考えることなく、2本に増やした指を広げて後孔に隙間を作ると、例の薬のチューブをそのまま挿し込んできた。まずい、それを中に塗られて前の時は死ぬほど泣き叫んだのにと、俺は縛られた身体でめちゃくちゃに暴れた。

「嫌、嫌だっ！中には塗るなっ！！」

「ん～、でももう遅いかな」

「うはああっ！？」

それでも汐音は、俺の抵抗を無視してチューブを押し、中に薬を流し込んでくる。にゅるりと出てきたジェルの感触に、ぶわっと鳥肌が立った。でもそれを外

に押し出す術はないから、俺は汐音の指で中全体に薬が広げられるのを止められない。状況が自分に不利に傾いているのを、ただ見守ることしかできなかった。ああ、終わった。これを塗られたら、絶対に耐えられないのに。じくじくと中が疼いてどうしようもなくなるのにと、絶望で涙がこぼれてくる。

「ひ、う、うう、嫌、やああ...っ！」

「大丈夫、この薬が本格的に効いてくるまでは時間があるから。ピークはあと1時間後くらいだし。それまでは平気でしょ？」

「平気、じゃ、ないっ！」

「もちろん放置はしないよ？ブジーだけじゃ足りないと思うから、こっちの中はバイブにお世話してもらおうね」

でも絶望には更に深みがあった。いっそ何も入れずに放置された方がマシなのに、汐音は散らばった玩具の山からバイブを手にとって、それにも薬を塗ったうえで俺の中に入れてくる。いらねえよ、ケツの世話をするくらいなら俺のメンケアをしろと思うけれど、楽しそうな汐音に水をさすと後が怖いので黙っておく。

「ん、んんんうう...！」

「せっかくだから、明の気持ちいいところに当てておかないとね。あとは抜けないように固定しておいて...」

「っは、あ、あゝ、あああっ！っひ、い、やだ、ここやだ、押されて、る、やなとこ、当たって...っ！」

ただし、黙っていたからと言って汐音の対応が優しくなるわけじゃない。強めにいじめられないだけで、放っておいても事態は悪化する。薬を塗り広げる目的なら、バイブの先端が前立腺に当たらなくてもいいはずじゃないのか。余計なことをするなと左右に身をよじってみたものの、専用のバンドで位置を固定されてしまったせいで、どれだけ身体をひねっても意味がなくなった。

きゅ、と内側に力を入れると、勝手に前立腺が押される。彼の手が離れたことで、ブジーにローターが当てられる地獄からは解放されたものの、ブジーそのものは抜けていない。両側から敏感な場所を刺激されているのも、射精できないのも、どちらも今の俺には耐えがたいことだった。

だけれどそれ以上に心にくる仕打ちを、汐音は何個も頭に思い描いている。

「じゃあ俺、仕事が残ってるからさ。それが終わった後でまた来るね」

「なっ、何言って...！？置いてくなっ！」

「だって資料の手直しが間に合わないって言ったら、家に持って帰ってでもやれって、明が自分で言ったんじゃない」

まさかここに来て、がっつり放置プレイに持ち込まれるとは思っていなかった俺は、ガンと頭を殴られたような衝撃が走った。確かに昼、汐音の仕事の進捗があまりにも遅れていたんで、だったら家でもやれと言ったかもしれない。でもまさか、今になってその言葉を逆手に取られるとは思わないじゃないか。

最悪だ、数時間前の俺の発言が、今の俺を苦しめることになるなんて。

「い、いい、そんなのいいから...！後でいいから、一人にするな...！」

「ごめんね明。俺も一緒にいてあげたいんだけど。仕事はちゃんとしないと、怖い上司に怒られちゃうからさ」

ぼろぼろの顔で泣きついたら、瞳の下にキスを落とされた。そのタイミングで、止まったままだったバイブが震え始める。小さな突起を纏った先端部も回転していて、こりこり、ぷちぷちと俺の前立腺を刺激してくるのは、まぎれもなく拷問に近かった。

「——ッ、あゝ ...！！あう、うゝ ううううっ！！？」

「じゃあね、明。いい子で待ってるんだよ」

バイブが動いたのを確認した汐音は、俺の頬にもキスをすると、本当に部屋から出て行ってしまった。嘘だろ、本気で俺を一人にする気かと1分くらいは怒鳴っていたが、徐々に快感が強くなってきて、喋るどころじゃなくなっていく。

「っ、ああ、ぐ、っ、ふ、ざけんな、汐音、帰ってこい汐音っ！！」

「ふう、ふう、っ、う、うう、い、や、だ、止めて、これ止めっ、キツイ、キツイからああっ！」

「んふ、ふ、っ、ふっ、ッ、〜〜っンンンンゝ！！ああ、あっ、や、だめ、今だめ、も、とめっ、っ、は、ああゝ ああああっ！！」

おそらく薬を塗られていなくても、ブジーとバイブの刺激だけでイクくらいには強い快感になっていると思う。多分、塞がれていなければあっけなく数回射精す

る程度には。ただし、今も出口こそはないものの、絶頂に至る快感は与えられ続けている。イッている最中も止まらないバイブはそれこそ凶悪で、俺の理性ごと削り取っていく。

「ひいいゝゝ いいい...！！んああ、イク、イク、う、うううんっ！！っは、は、ま、あああ、イッ、た、イッたのにいい...っっ！！だめ、もういい、もお、もおおおっ！うう、あ、止まっ、んんんゝ！！っひ、い、助けッ、あ、あ～～～っっっ！！！」

縛られている身体が、ありえないくらい痙攣していた。人体の限界を超えた快感を送り込まれて、身体は困惑している。それなのに例の薬が徐々に浸透しているせいで、イクまでの間隔は時間とともに短くなっている気がした。

そしてバイブが入っている方も苦しいが、先に媚薬が塗られた尿道側もキツかった。さっきは抜き差しされたり、振動されたりと多少動きがあったものの、今は抜けないだけで動くことがない。

じく、じく、と熱が上がっていくのに、刺激が減っている。それが尿道側では辛い。いっそ何も与えないつもりなら、彼がいなくなる時に抜き去ってくればよかったのになと思う。中途半端に残されたせいで、イケない切なさだけがつのっていく。

でもそんな風に俺が悶々としている時。中のバイブに変化が起きた。

「ふぐう...！ん、う、うううう...！ッ、え、あ、あっ！！？」

ブン、と振動音が大きくなったかと思うと、中のバイブの動きが突然激しくなった。嘘だろ、このバイブって遠隔操作もできるタイプなのかよと思うと、次は急に振動が弱くなる。それが逆に、俺の心を弱らせた。

ヤバい、汐音は見えないところから、俺を操ろうとしている。延々悶えさせることも、強振動でイカせまくることも汐音の自由だ。最悪だ、これなら同じ刺激が続く方が耐えられたかもしれないと焦っていると、またバイブが激しく動き出す。

「ひんうゝ うううっ！！あああ！待っ、や、あああああっっ！！は、は、や、イク、イク、〜〜っんんん！！あああああダメダメ！イッた、から、キツイ、キツ、い、いゝっ、っぎ.....ツッ！！！」

中でうねるバイブは、ゴリゴリと俺の前立腺を強烈に押し込んで、内部全体をかき混ぜている。そんなに無茶苦茶するなともがいても、固定されたバイブはいい場所から外れない。延々前立腺を揉みこんでは、時にうねりがなくなり、回転が追加されて、振動が弱まったり強くなったりする。

「んあああああ...！あああ、あ、あ、あふ、うううんっ！ひ、ッ、だめ、もおだめえええ...！おが、ひ、く、なっ、だめ、中もう許ひ、ああふ、うう、ううう...っ！」

汐音の思惑通り、媚薬が効果を発揮するにつれて、微細な刺激も感じ取る身体になっていく。直腸から吸収された媚薬は、いつの間にか俺の全身に回っていった。心臓の鼓動も早いし、皮膚感覚も鋭敏になっている。

泣きすぎて目が痛い。呼吸ができているかも怪しい。中イキを繰り返していて、もう何をされてもイク気がする。

辛い。苦しい。耐えられない。どうにもならないと、そう思って心が崩れかけた時、ひと際激しくバイブが震えた。ごりっと思い切りいい場所を抉られて、一瞬本気で息が止まる。

「ッ、う——————ッッッ...！！！！」

バチンと、視界が真っ暗になった。確かに照明は薄暗かったけれど、そういう話じゃない。あ、これはもうダメだと思った次の時には、俺の意識は完全に飛んでいた。

「...い、明。明ってば」

「うあ...？」

ぼんやりと真っ黒な世界の外から、汐音の声が聞こえた。瞼を開くと、ほのかに橙色に照らされた汐音が見える。は、と息をした時、自分がまだ生きていることに少し安堵した。いや、おそらく死ぬことはきつとないんだろうけれど、彼にい

じめられているときは、過酷過ぎて時々本当に死んでしまうんじゃないかと思う時はある。

別室にいた彼が目の前にいるので、どうやらあれから時間が経って、失神していた俺の元に戻ってきたらしい。後ろに入っていた玩具も抜けているのか、腰が少し軽い。だから目が覚めた瞬間の俺は、汐音がいることと、自分への負荷が減ったことにただただ安心してしまった。だから伸びてくる汐音の手にも、なんの違和感も抱かなかった。その手が救いの手であると決まったわけではないのに。

「声かけても起きないからびっくりしちゃった」

「そ、それは、お前がめちゃくちゃするから」

「でも俺は、明がやれって言った仕事してたんだけど？なのにやれって言った張本人が、どうして俺が見てないところで休んでるの？人が見てないからさぼるなんて悪い子」

「えっ」

俺の額に伸びてきた手が、くしゃりと俺の頭部を撫でる。でも汐音の手は冷たくて、手つきは優しいのに肝が冷える。よくよく見れば、汐音はひどく不満そうな顔をしていた。こういう顔になったときの汐音がきついお仕置きをすることを、俺は経験で学んでいる。

「っ、ちが、休んでたわけじゃない！意識がなくなったってだけで」

「寝てるのと一緒にだよね、それ。イクだけイッて、気持ちよくて眠っちゃったの？」

「んんぐっ！！」

俺の頭を撫でていたはずの手は、いつの間にか下半身の方に伸びていた。そしてまだ入ったままのブジーを、ぐりぐりと押し込んでくる。ぐりっと押された急所から、槍で貫かれたみたいな衝撃が走った。イキそこねた精液をかき混ぜられて、ぐらりと目の前がくらむ。

「ひぎ、う、ああ、待っ、ッ、んんんっ！や、あ、イケてない、そこまだ、出せて、な...ッ！」

「お薬も塗ったし、ブジーとバイブで準備したから、仕事の後で明のこといっぱい可愛がってあげようと思ってたのに。俺のこと無視して寝ちゃうような子は駄直しかな」

「ふうう、ッ、あ、や、だめだめ、中はキツ、うう、んんんンン`っ！！！」

寝室には時計がないから、俺がいったいどの程度意識を飛ばしていたのかは分からない。けれど、少なくとも部屋が暗いままだから、朝になってはいないと思う。だから起きるまでの時間は5分くらいの短時間かもしれないし、30分か、1時間とかそれくらいかもしれない。ただしいずれにせよ、媚薬は俺が起きていた時間以上に効いている。汐音から手マンされた時に、はっきりと自覚した。

2本入ってきた指が、前立腺を引っかく。かぎ状にした指先を抜き差しされると、敏感に育てられた前立腺がゴリゴリと押されて、その度に頭が吹き飛ばかと思った。バチバチっと下半身から腰へ、背中から頭に快感の電気が走って、回復した気力と体力が瞬間的に減っていくのを感じる。

「んああああっ！！ああ、だ、め、それッ、あ、あああううっ！！っひ、ぎ、
ごえ、なさっ、待ってなくてごめんなさ、あ、ひいッ！」

「俺のじゃなくて、玩具で遊んで失神したってどういうこと？待てもできなくなっちゃった？」

「ふううう、ううっ、あ、ご、め、なさっ、我慢、できなく、て...！バイブ、ぎもぢよすぎ、てえっ！！」

「いくらよくても許せないなあ。ねえ、明は誰のモノなんだっけ？」

「んんううううっ！！！！」

奥まで入ったブジーを軽く抜き差しされると、前立腺を内側から押される快感と、精液がせりあがっては戻される感覚の二重苦だった。しかも手マンもされているから、実質的には三重苦だ。あとは汐音から放置されていた時にはブジーが動かなかった分、今動かされるとめちゃくちゃ効く。媚薬も浸透しているから、一番最初に遊ばれた時よりも快感が重い。

ぬちぬちぬちと、容赦なくブジーを動かされた。縛られたところから腕や足が千切れそうなほど暴れても、汐音は手を止めてくれない。まずい、汐音がキレている。彼を落ち着かせるようなことを、最低でも少しは満足させるようなことを言わなければ。一刻も早く彼の機嫌を直してもらわないと、人格を丸ごと壊されてしまいそうだった。

屈辱的な台詞を自発的に言うなんて、以前の俺なら考えられない。人がこれを舐めと呼ぶならそうだろう。でも言うことを聞かないデメリットの方が大きいんだから、ある意味賢い選択だ。

「汐音のっ！汐音のものですっ！」

「そうだよね？なのに俺の事待ってられなかったの？」

「ひぎ、いい、ッあゝ、ごえ、な、さ、あああっ！イキ過ぎて、意識、飛んでッ
...！ふぐ、う、うううっ！汐音のこと、待てなくて、悪い子に、なっ、あ、あ
ゝッ、んゝんんっ！」

「悪いって自覚あるなら寝るな。一人で遊んで楽しむなよ」

「うはああああああっ...！！！！？」

俺は回らない頭で必死に考えて、どうにか謝罪と反省を述べた。それで許してもらえるかは分からなかったけれど、俺は悪くないと主張するよりはマシだ。

でも俺の言葉は、それほど汐音に響かなかったらしい。だから指が抜けるかわりに、彼の熱が俺の中に押し入ってくる。バイブよりも太いものに擦られて、俺はまたしても中イキしたと思う。目の回る快感に、ぎゅうう、と足のつま先に力が入った。

だけれど汐音は、ただ入れただけで終わらなかった。彼はいきなり、俺に入れていたブジーを引き抜いた。え、なんで急にと思いはしたものの、ようやく解放された出口に向かって、精液が勢いよく昇っていく。塞がれていた場所からどばっ
と出ていくそれが気持ちよすぎて、俺はほわりと脳をとろけさせた。

「あふ、ううううううん...！！ふ、ああ、イク、イクっ、いっぱい出ッ」

「...はい、イクの終わり」

「ひぎいいゝいゝっっ！！！！？？？」

けれど精液が出せる時間はごく僅かだった。5秒も経たないうちにもう一度ブジーが入れられて、入り口までせりあがった精液が奥まで押し戻される。

射精を強制終了されたことも辛かったし、イケると思った気持ちを踏みにじられるのもかなり辛かった。そのせいで涙が溢れてきて、言ってはいけないことを口走ってしまう。

「は、あ、なん、で、なんでえええ...っ！！」

「なんでって何？今日は俺がいいって言った時しかイかせないよ。舐け直すって言ったでしょ」

「や、あゝ、許して、もうイかせて...！」

「口答えするのも直さなきゃね」

「うはあゝ ああっ！！んんんうっ！や、あ、ああっ、まっ、だめ、おあ、あ、あゝ ああああっ！！」

機嫌が悪い汐音に口答えするのは、悪手中の悪手だ。なのにそれすら忘れていた俺は、また火に油を注いでしまう。腰を掴まれて思い切り中を突かれた時は、敏感な場所を狙われて頭が焦げそうだった。そもそも中全体が敏感だし、前立腺は特に仕上がっているのに。無遠慮に突かれたらイッてしまう。出せないのにイク。中イキしても許してもらえないと、縛られた身体でもがいては絶頂していた。

ー続きは本編にてお楽しみくださいー